
雨降りとロリンズ

たのシイナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨降りとロリンス

【Nコード】

N4607P

【作者名】

たのシイナ

【あらすじ】

雨の日の女と男の出会いをスケッチ。少し滑稽に描いています。内容的には男の人に失礼かもしれませんが、悪しからず。

会社から出た途端、カオリの顔に雨粒がかかった。彼氏居ない歴二年。カオリは我が家へと歩みの速度を早めた。

駅までなんとか行けると急いだが、ものの100メートルも行かないうちに本降りになってしまった。慌てて飛びこんだのがCDシヨップの軒先。大手ではなく、こじんまりとした店だ。

すでに同じような雨宿りで立て込んでいる。

いち早く店員が軒先の雑誌類の上に広げた透明ビニールの上にも、点々と雨垂れがついていた。

雨宿りの男女の濡れた衣服や髪の毛から、ケモノの匂いが立ち昇り、それが女たちの香水や、男たちの整髪料の匂いと混じって、ほとんど耐え難くなってくる。

カオリは首だけねじって、後方の店内にまだ多少のスペースがあるのを認めると、人々を掻きわけて奥へと進んで、見るともなくタイトルを眺めていた。

背後ではまだ道に落ちる激しい雨の音がしている。レジの店主とおぼしき中年の男が、自分ばかりをチラチラと見ているような気がした。

雨宿り代に千数百円を払うのはきびし過ぎるだろう、とカオリは思いながら、それでも素振りだけでもと適当なCDに手をかけた。その時だった。

「その二つ隣りのソニー・ロリンズ、最高に面白いよ」
という男の声が、カオリのすぐ耳の背後でした。

あまりにも近いので、男の温かい息が皮膚に感じられるほどだった。

余計なお世話だと、チラッと横目で見ると、黒のショルダーバッグを肩から提げた若者。年はカオリと同じか、下かもしれない。

カオリは微かに肩をすくめる程度にとどめた。

「良かったら、どこか感じのいいバーで、フィノ・アモンティリヤードでも飲みながら、ソニー・ロリンズについて話ませんか？」

まずまずの囁き声で熱い息とともに、彼はそうカオリの耳の中へと吹きこんだ。

「わたしに言ってるの？」

カオリはその彼の方は見もせずに、片方の眉だけを上げて言った。

「ボクのこと、馴れ馴れしい奴だと思ってるんでしょう？」

彼は少しも怯まずに笑顔をつくって見せた。

「その通りよ」

と、カオリは男から離れながら言った。

「誰にでも声をかけるような男だと、思っているんでしょう？」

「違っの？」

「だとしたら、あなたは自分を低く考え過ぎているな。そこら辺にいる女の子と同じように、自分のこと思っているんですか？」

なかなかのセリフだと思ったが、その風態にはおよそ似合わない。男は顔とは言わないが、言っているセリフと悪いのがある。

爽快さなど微塵もなく、滑稽感まで漂ってくる。カオリはその点に同情を禁じ得なかったが、彼女にも趣味というものがあつた。

彼は中肉中背。肩はがっちりとしているが、どこか鈍重。硬そうでもめの髪。フケ性かも知れない。

そんな分析をささとやって、カオリは言った。

「悪いけど、興味ないわ」

まるで顔の前をブンブン飛んでいる蠅でも追い払うような仕種と共に、そう冷たく言い放つた。

「し、しかし、ロリンズのブローは絶品なんだがなあ」
彼は慌てて食い下がる。

「そうじゃなくて」

「フィノ・アモンテリヤードが嫌いなら、何か別の飲みものを」
必死のあまり、唾液を飛ばしながら言い募つた。

「あのね、興味がないのは、あなたなの」
カオリはとどめを刺すように言った。

一瞬、彼の表情が酷く驚いたようになった。次に、見開かれた両の目に痛みとも悲しみともいえない色が浮かんた。

なんと大袈裟なと内心思いつつも、カオリは急になんとも後ろめたいような気分に襲われた。

彼から滲み出す幼児のような無防備さは、彼女に嫌悪の情をもよおさせたが、同時に踵を返して歩み去り難い気持ちもした。

彼の目からは今にも涙が零れ落ちそうだと思った。

彼女はうるたえたが、それを隠すように出入り口に向かうと、彼も黙って付いて来る。

街に煙る雨は、だいぶ小降りになっていた。軒下で雨宿りをしていた人々の数が減っていた。

すぐ背後に、まだ男が付いて来るのがわかった。

「どこまで付いて来るつもり？」

振り返りもせずにカオリが訊いた。

「その先に素敵なカフェバーがあるんだけど」

と、彼はカオリと肩を並べながらおずおずと言った。

再び雨降りの街。カオリは投げやりに肩をすくめた。

カフェバーは別に素敵でもなんでもなかった。湿った革とカビの匂いがしていた。

「何を飲む？」

彼は気を遣いながら、まだ少しおずおずと訊いた。

自分で誘っておきながら、カオリがその場にいるのが信じられない

いといったふうだった。

奇妙な可笑しさと、あきらめの感情がふつつつと湧き起こるのを感じながら、カオリが言った。

「そうね、じゃ、フィノ・アモンテリヤードを」

それを聞くと、彼の顔がぱつと輝いた。

「フィノ・アモンテリヤードを二つね」

彼は嬉しそうな声でバーテンダーに注文した。

「さて、と」

彼はもみ手をしながら、カオリの横顔を覗き込んで言った。「だけどちょっと意外だな。あなたみたいな女性がどうして」と、今更のように。

「それよりソニー・ロリンズのことを話してよ」

カオリは彼の言葉を途中で遮って言った。

「え？ …… ああ、そうね」

彼は急にうつろたえたように視線を宙に泳がせた。

そこへグラスに注がれた飲み物が二人の前に置かれた。

「じゃ、まず乾杯といきますか」

彼はグラスを持ち上げたが、カオリは相手とグラスを合わせず、それを口へ運んだ。

チビチビと舐めるように飲む男を尻目に、彼女はぐつとふた口であけてしまうと、軽く音をさせてグラスを置いた。

「ソニー・ロリンズなんて聴いたこともないんでしょう？ それに
フィノ・アモンティリヤードも初めてなんでしょう？」

横で彼が赤くなつて視線を落とした。
「すいません」

なんだか可笑しくなつて、カオリは笑つた。
彼もつられて笑つていた。
でも、お腹の中は冷えびえと寒かつた。

「はあっ」
と、この世のものとは思えないほどの溜息をつくとき、カオリは首
をすくめて窓を見た。

もうつ……晴れたらいいのにな。
窓ガラスを伝う大きな雨粒がひとつ、途中でふた手に分かれて落
ちた。

「了」

（後書き）

ジャンルを恋愛としていますが、なんとも成就しない話で……いや
はや……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4607p/>

雨降りとロリンズ

2010年12月19日01時53分発行